

ブータン王国の造形教育

－ GNH から見出されるデザイン教育としての可能性 －

Art education in the Kingdom of Bhutan.

－ Possibility as design education found by GNH. －

横浜国立大学 大 泉 義 一

I ブータン王国とGNH

現在、教育に関する国際的な話題として取り沙汰されているのは、OECD（経済協力開発機構）が実施した「生徒の国際学習到達度調査」（PISA）の学力調査の結果であろう。そこでフィンランドが義務教育として世界第一位の評価を得て注目されたことは記憶に新しい。その後、2010年には国としては参加していない中国から都市として初参加の上海が、読解力、数学的応用力、科学的応用力の全てでトップとなり、中国大都市圏の教育レベルの高さを国際社会に見せつけた。しかしながらこれらの論議は、欧米の先進国を中心とした国際経済全般を検討することを目的としたものである。そもそもOECDは、「先進国クラブ」と呼ばれることもあることから、いわゆる“経済中心”の社会観に基づく論議なのである。

ところで、こうした社会観に対して異を唱えているのが、ブータン王国（Kingdom of Bhutan）である。ブータン王国は、ヒマラヤの麓に位置する人口65万人、面積47,000㎡の立憲君主制の小国である¹⁾。その国土は標高300m～7,500mと多様性に富み、日本と同様に四季がある。首都はティンプー（Thimphu）。その国民の約7割が米を中心とした自給的な暮らしを営んでいる。宗教は仏教であり、公用語は英語と母国語であるゾンカ語であるが、小・中学校の授業では主に英語が使われるため、若年層では英語中心のコミュニケーションが行われる傾向にある。

ブータン王国の名を世界に知らしめたのは、「GNH」という言葉の概念である。「GNH」とは、「Gross National Happiness」の略語であり、和訳されると「国民総幸福量」となる。これは、ブータン王国の若き第4代国王、ジグメ・センゲ・ワンチュク（Jigme Singye Wangchuk）が、1976年にコロンボで開催された第5回非同盟諸国会議において“GNH is far more important than GNP. (GNHはGNPよりも重要である)”と発言したことから生まれた概念である²⁾。GNP（国民総生産・Gross National Product）が国の豊かさを数値化して示すのとは異なり、GNHは国民全体の幸福度を示す尺度であり、経済的豊かさを中心にした物質社会への警鐘を鳴らす概念として注目されたのである³⁾。実際にブータン王国では、このGNHが国家の目

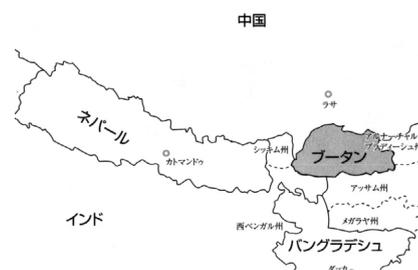


図1 ブータン王国と近隣諸国

標として位置付けており、政府によって2007年に行われた国政調査では、「あなたは今幸せか」という問いに対し、約9割が「幸福である」と回答している⁴⁾。このGNHについて、国立研究所所長のカルマ・ウラ（Karma Ura）は次のように述べている⁵⁾。

「経済成長率が高い国や医療が高度な国、消費や所得が多い国の人々は本当に幸せだろうか。先進国でうつ病に悩む人が多いのはなぜか。地球環境を破壊しながら成長を遂げて、豊かな社会は訪れるのか。他者とのつながり、自由な時間、自然とのふれあいは人間が安心して暮らす中で欠かせない要素だ。金融危機の中、関心が一段と高まり、GNHの考えに基づく政策が欧米では浸透しつつある。GDPの巨大な幻想に気づく時が来ているのではないか。」

このGNHには4つの柱とそれを計測するための9つの指標がある⁶⁾。すなわち4本柱とは、①健全な社会経済の自立、②環境保護、③文化の保護と振興、④よき政治であり、9つの指標とは、①生活水準、②文化の多様性、③人々の健康、④精神衛生、⑤教育、⑥時間の使い方、⑦コミュニティの活力、⑧自然環境、⑨よき政治である⁷⁾。

以上のように、ブータン王国という小国が目指す社会のあり様とは、上記GNHの要件を眺めてみてもわかるように、私たちが生きることに對する意味や価値に對する質的な側面を重視し、かつそのことを実現しようとする開発的アプローチと検証方法がともに質的である。そうした、一種非合理とも見える丁寧な歩みの積み重ねの上に、国家の未来をつくりだしていこうという理念を見て取ることができる。そしてそれは教育においてもまた然りであり、その様態は、冒頭で紹介したような教育をめぐる言説とは一線を画している。

II 目的と方法

本研究では、ブータン王国において行われている造形教育の概要を明らかにし、そこから我国の造形教育に対して示唆を得ようとするものである。そのために、以下の作業手順を踏む。

- (1) ブータン王国の概要をスケッチする。
- (2) ブータン王国における教育の概要を明らかにする。
- (3) ブータン王国における造形教育の現地視察調査を行い、GNHと教育の関係から造形教育の位置付けを検討する。
- (4) 我国の造形教育、とりわけデザイン教育に対する示唆を明らかにする。

上記作業のうち、(1)、(2)は(3)の現地視察調査に向けた文献を中心とした事前調査である。(4)は(3)の調査を踏まえての考察である。(3)の現地視察調査は、2011年3月7日から11日の日程で行った。ところで、ブータン王国に足を踏み入れるには、「公定料金制度」に従う必要がある。これは、旅行者が比較的高く設定された公定料金を事前に支払って旅行を手配することを義務とした制度である。旅行者は、多少の変更は可能なものの、旅程はあらかじめ組んでおく必要がある。その旅程においては、現地ガイドとドライバーが出国まで行動を共にする。公定料金は1泊あたりで設定され、その中に、宿泊、食事、移動(車やドライバーの費用)、ガイド、入場料などが含まれる⁸⁾。この公定料金制度は、隣国ネパールの観光開放による負の影響を見たことによると考えられている⁹⁾。ネパールでは、伝統文化を尊重せずグローバルな思想を持ち込むヒッピーや、経済的に貢献しないバックパッカーが数多く流入することによって、伝統文化の喪失や自然環境の破壊などマイナス面だけがもたらされたという認識からである。

III ブータン王国の教育

1. 教育の概観

ブータン王国では、GNHの重要な柱の一つである文化の保護及び振興のために、教育制度の拡充を国の最優先政策のひとつとして掲げている。その教育に関しては、首都圏パロ(Paro)にある教育省が全土の教育行政を所管している。全土に設置されている学校は一部の私学を除き、この教育省の直轄であり、授業料、教科書、文具、宿舎、制服、交通費、スポーツ用品、医療費などはすべて無償である。学校制度は、6-2-2-2制である。まず6歳が学齡下限となっている就学前教育(Class PP・Pre Primary school)が1年間位置付けている¹⁰⁾。実際に通う子どもは、年齢

制限が下限であるために、6歳よりも高齢の子どもが在籍していることもあるし、その逆に年齢を偽って6歳以下の子どもが入学していることも多いという。初等教育は7歳からの6年間(Primary school)、中等教育は2年制の前期中等学校(Lower Secondary school)、2年制の後期中等学校(Middle Secondary school)であり、ここまです基礎教育レベルとして考えられている。その後の2年制の高等学校(Higher Secondary school)、4年制の単科大学(College)や3年制の教員養成所などは個人選択である。学年は第1学年から12学年(Class I~Class VII)まで通して呼称されている。2003年には、ブータン総合大学が設置され、多くの教育機関が統合されつつある。

2. 教育の普及状況

先述したように、ブータン王国の教育はすべて無償であるにもかかわらず、その就学率は近隣国と比較しても決して高いとはいえない¹¹⁾。(表1)その理由には、通学範囲が広すぎる点、移動生活を行っている遊牧民がいることや、現在でも特に地方では、一家庭から子ども一名は各地の寺院に修行に出ることが慣習になっていることなどがある¹²⁾。

また先述したように、教育政策は国の重要課題とされながらもブータン人の教員は現在でも少なく、インド人教員の数が多い状況である。何よりもインドの教科書をそのまま用いている教科もある¹³⁾。もちろんこうした問題に対してブータン王国の教育省は自覚的であり、急ピッチで教員養成課程の整備・拡充に取り組んでいる。

3. 教育課程

教育課程は、全学年を通じて英語とゾンカ語、数学とモラル教育の4教科が必修科目である。加えてClass IVからVIIIまでは理科があり、Class IX、Xでは理科に代わり、物理、化学、生物、コンピュータの4教科が位置付く。またClass PP、そしてClass IからIIIまでは環境教育、Class IVからVIまでは社会科、Class VIIからXまでは歴史と地理があり、Class IX、Xには経済の教科が位置付けられている。さらに学校裁量の教科として、音楽、体育、図画工作(造形)、社会奉仕などがある¹⁴⁾。日本の図画工作・美術科に相当する教科は、初等中等教育を通じて、学校裁量の教科

表1 ブータン王国及び近隣諸国の就学率

※就学率=実際の就学者数/制度上就学すべき年齢の人口、単位は%、()内は調査年。

	初等教育		中等教育		高等教育	
	女性	男性	女性	男性	女性	男性
ブータン	85.9	99.7(03)	41.7	49.4(03)	6.4	10.8(03)
バングラディシュ	110.7	107.3(04)	48.1	46.6(04)	4.5	8.4(05)
インド	115.7	122.6(05)	50.1	62.6(05)	9.3	13.4(05)
ネパール	123.0	129.0(06)	40.4	45.6(06)	3.2	7.9(04)
スリランカ	101.1	102.4(05)	82.6	82.4(04)	4.5	6.2(97)

ということである。

ブータンでは、Class PPで5・6歳児が、英語のアルファベットや足し算、引き算を当たり前のよう学習しており、基本的には教授中心の教育が主流のようである¹⁵⁾。学校で使用されている言語は、公用語はブータンの母国語であるゾンカ語とされ、第二公用語として英語が位置付けられているが、Class PPからすでに英語教育が行われ、全学年を通じて英語が必須科目となっているなど、授業においてもゾンカ語で教える教科が圧倒的に少なく、むしろ“外国語”扱いといっても過言ではない。筆者が訪問した小学校においても、低学年の授業はすべて英語で行われていた。

以上のように、現在のブータン王国の教育では、特にインドからの影響を受け、冒頭で掲げたようなグローバル・スタンダードな指標、すなわち量的に計測可能な指標に対する関心が高いこともまた事実である。

IV ブータン王国における造形教育

先述の通り、ブータン王国においては、造形教育は学校教育の必修教科として位置けられていない。そこで本研究では、以下の造形教育の実践を現地視察調査の対象とする。第一に、伝統美術を専門に学ぶ伝統技芸院（Zorig Chusum・ゾーリン・チュスム）、第二に就学前教育（Class PP）を含む初等教育の授業実践（そこで扱われている造形表現）、第三に学校教育外のNGOによる造形教室である。以上三つの教育現場における造形教育実践の実態を明らかにすることから、GNHと造形教育との関係性を検討してみたい。

1. 伝統技芸院(National Institute for Zorig Chusum・ゾーリン・チュスム)

(1) 伝統技芸院の概要

ブータン王国の伝統美術を専門に学ぶ伝統技芸院は、首都ティンブー（Thimphu）の小高い丘の上にある。（図2）先述したように、ブータンではGNH実現のための政策の一つとして伝統文化の保護と継承を掲げている。本院はその政策を担っている教育施設の一つである。4～6年制の寄宿制で、他の学校教育と同様に授業料や寄宿費用は無償である。生徒数は約250名である。ブータン王国には伝統技芸として保護・継承されるべき以下の13領域があり、本院においても、これらの技術をそれぞれの専攻の教室で教授している。

1. 竹細工
2. 木細工
3. 織物

4. 金・銀細工
5. 塑像
6. 鋳造
7. 紙細工
8. 絵付け
9. 刺繍
10. 建築
11. 木彫り
12. 鉄工
13. 漆



図2 伝統技芸院の外観

(2) Jigme Dorji 学校長へのインタビューから

(2011年3月8日)

・教育の目標について 伝統美術に関する知識と技術を教授し、生徒達がその後の進路を決定するために必要な能力と資格を与えることが目標である。本院を卒業した生徒は技術を身につけることができるので、就職先は、寺院、家屋の装飾絵師、工芸師、そして本院の教員など、恵まれている。

・授業実践について 実技の授業では、教師が描き方や制作方法を提示し、生徒がそれを模倣するという学習形態が中心である。とりわけ下学年の段階では、「かたちを正確に描く」指導を重視しており、『コンピテンシー・ベース・トレーニング』という学習方法を採用している。これは専攻・学年ごとの学習内容に達成すべき課題を設定し、生徒がそれをクリアすると次の学習へとステップが進行していくものである。

・小・中学校との連携について 小・中学校では伝統的な模様を描く学習が多く行われており、その経験が基になって本院に入学してくる生徒も多い。また水曜日や土曜日の午後に「クラブ活動」の時間を置いている学校が多く、そこに『Art club』が設置されていることもある。そこに本院の教員がゲストティーチャーとして招かれ、特別授業を行うこともある。こうした取り組みは、子どもたちに伝統美術に対する興味・関心を抱かせることができるので、伝統美術の継承のために極めて重要であると考えている。今後はより多くの小・中学校に足を運ぶことを希望している。

・GNHとの関係について 本院の教育活動とGNHの考え方には、もちろん密接な関係がある。すなわち「文化の保護と伝承」においてである。GNHの実現のためにも、本院が開設している13の専攻すべての発展が求められている。ゆえに、生徒達が本院で身に付けた伝統美術に関する技術が、自分の生活収入のためだけでなく、国家のアイデンティティーを保護し発展させていくものなのだという自覚をもたせることが重要である。自分の手によってつくら

れたものが寺院や街に設置され、人々の生活の中に位置付くが故に、強力な発信性、メッセージ性を有しており責任は重大なのである。

(3) 授業の参観と教員へのインタビュー(2011年3月9日)

中心的に参観したのは、「塑造」と「絵付け(仏画)」の教室である。参観しながら何人かの生徒にインタビューし、さらに「塑造」の教室では、指導している教師にその場でインタビューすることができた。

① 「塑造」の授業の様子

授業では、ちょうど課題の節目であったために、生徒が実際に塑造を制作している様子を見ることはできなかったが、生徒達は次の課題のための粘土の練りに勤しんでいた。机の上や棚には完成した塑造作品が所狭しに並べられており、その完成度や精度には目をみはるものがあった。壁面には仏像の本体及び装飾の詳細な図面が掲示されており、形に対する厳しい探求を想像することができた。

② 「絵付け」の授業の様子

ここでは「仏画」の授業を参観することができた。生徒達はみな真剣に手本を模写する作業に取り組んでいた。描画材は鉛筆であり、定規やコンパスも使いながら集中して活動をしており、教室はしんと静まり返っていた。(図3)課題が完成した生徒は、担当教師に提出し手直しを受けていた。模倣を中心とした『コンピテンシー・ベース・トレーニング』が実践されていたのである。生徒に「この学校で学んでいて何が楽しいか」と問いかけたところ、「自立して生活できるようになること」を真っ先に答えた。ここに職能開発としての本院の存在意義を確認することができる。さらに「仏像を描くこと自体が楽しい」こと、そして「釈迦の形の中にある意味を発見できる」ことを挙げていた。学校長がインタビューで述べていた教育理念とほぼ同一線上にある答えと言ってよいだろう。

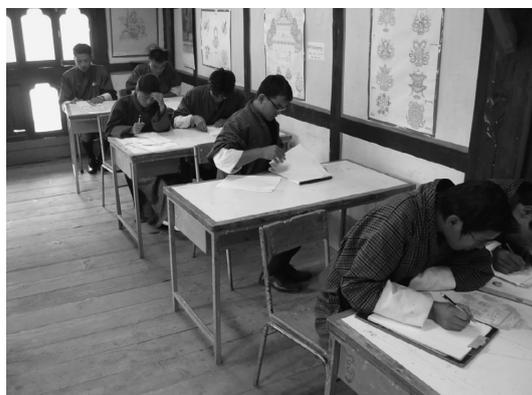


図3 伝統芸芸院での「絵付け(仏画)」の授業の様子

③ 「塑造」担当教師へのインタビューから

僧侶になるよりも仏像を制作する方が御利益があると指

導している。そもそも仏像の形態の一つ一つの意味は經典に掲載されているものである。つまり造形と信仰は一体化しているのである。本院の生徒達も朝、昼、夕方と経を唱えている。そして主要な造形材料である「土」は万物の基となるものであり尊いものであると考えている。以上のような仏像制作に込められた意味を知ると、生徒達はより高い関心・意欲を示すようになるのである。

(4) 考察

伝統芸芸院は、まさにGNHという概念を教育において実効化する重要な位置にあると言える。我国の図画工作・美術科の教育と比較して特徴的な点は、以下の3つにまとめることができるだろう。一つ目は、造形教育の目的がGNHの「文化の保護と伝承」と合一であること、したがってその教育内容は、ブータン王国の伝統として規範化されているもので、保護や奨励の活動なくしては消滅が危惧される技術や知識などを対象としている。そして当然ながらそれらには仏教としての厳格な思想が内在している。二つ目はその学習が学習者のキャリアに直結していること、三つ目は、その教育方法が、主に知識や技術の教授にあることである。これらは先述したように、GNHの政策との関連があるためである。

以上のように、本院では「造形」と「信仰」を統合させた教育が行われていた。そこでは、「造形」という表象的側面よりも、それを「造形する」という営為自体に対する意味が重視されているのである。そしてそのことを個人的な能力に還元するというよりも、仏教や自然を含めた自分を切り結ぶ「信仰」という関係性の中でとらえているのだと言えよう。

2. ジグメ・ロセル小学校 (Jigme Losel Primary School)

(1) ジグメ・ロセル小学校の概要

現在、ブータン王国の教育省は、学校教育現場への外部者の参観・訪問を制限している。今回の訪問は、現地観光業者と学校長との直接的なアポイントで実現した。ジグメ・ロセル小学校は、首都ティンプーの中心街にある1990年設立の学校である(図4)。全校児童は、男子426名、女子438名であり、教員数は33名である。中級家庭の子どもが多く通っており、同じ敷地内に中学校もある。学校長はChoki Dukpadearu氏である。『ジグメ・ロセル小学校の改善計画』によれば、2010年度の学校経営目標は、“Be a center for excellence in Primary Education.”であり、ブータンの初等教育において先進的な取り組みを行っている小学校である¹⁶⁾。そしてそのためのミッションは、「基礎学力とECCAプログラム(環境保護促進拠点プログラム・Environmental Camps for Conservation Awareness

Program) のバランスをとることによって良質な教育を提供すること, 「すべての子どもたちに年齢と性別に関係なく均等な学習の機会を提供すること」, 「日々の基礎的な学習において思わしくない成績の子どもには, タイムリーな支援と指導を行うこと」が挙げられている。



図4 ジグメ・ロセル小学校の外観

(2) 教育活動の参観 (2011年3月9日)

朝の8時過ぎにはブータン王国の正装である“ゴ”や“キラ”を着た子どもたちが登校してきた。子どもたちは外国人に興味があるらしく、恥ずかしがりながらも筆者に話しかけてきた。その際、みな流暢な英語を使っていた。Class PPの英語の授業では、アルファベットはもちろん、日常会話の発声練習、歌や体操が行われていた。どの教室の授業でも、30名ほどの子どもに対して、教師から子どもへの教授活動が中心の学習指導が行われていた。

(3) 学校長へのインタビューから (2011年3月9日)

学校長である Choki Dukpadearu 氏は、小・中学校長としての経験が豊富なベテラン教師であり、教員研修会のリーダーとしての役割を果たすことも多いという。

・GNH 実現のための取り組みについて 教育省から『GNH program』が提唱され、徐々に教育現場に伝播しつつある現在においては、教員研修のあり方が最重要課題となっている。当校においても、このプログラムを基に教員研修を行っている。その結果、教員の相互扶助の関係性が構築されてきている。教科書は以前からのものを使用しており、教育内容は変わっていないが、教育の前提となる「学校で学ぶことの意義」について深く考えることから学習を始めている。

以上のように、GNHの実践化には、そのためのカリキュラムやプログラムの開発に加えて、教師がGNHの視点から自身の教育実践を見直していくことが必要とされている。そしてそれは授業のみならず、学校生活全般に渡って実行されるので、保護者の協力的参画が増えてきている。

・教育実践におけるGNHの具現化について 先述したよ

うに、全学年において「学校で学ぶことの意義」というテーマで学習に取り組んでいる。校内の掲示板には、そのテーマに対するレポートを英語とイラストレーションでデザインしたポスターが掲示してあった。(図5) この掲示板には、“Sharing Time”という名称が付されている。“Sharing Time”とは、2008年から始

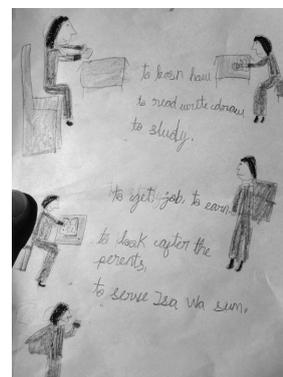


図5 “Why come to school?”

められたジグメ・ロセル小学校におけるGNHに基づく教育実践の一つである。この学習では、表2のように全学年に年間を通じて設定されている課題に対して、子ども自らが学んでいく。そして学んだことを掲示物などにまとめ、セッションを行うのである。例えば、気になった新聞記事についてグループで調査し、その結果を交流する学習などがある。そしてその過程では保護者も協力したり、ティンプーの街で地域の人と関わったりしながら学ぶのである。『ジグメ・ロセル小学校の改善計画』には、この学習は次のように解説されている。一部を要約して示す¹⁷⁾。

「共有することは、すべての子どもたちに適度な責任と民主的な経験を与え、平等な社会に貢献する機会を与える。…(中略)…それにより子どもたちは相互理解と相互扶助を促進しようとするであろう。…(中略)…教師は手助けする者であり、子どもたちに議論に参加することを促す。…(中略)…教師は、議論が活性的になるよう、子どもたちを励まして動機づけしなければならない。…(中略)…教師は子どもが自ら解決方法を提案することを奨励しなければならない。」

この活動では、Sharingする手段として造形表現が位置付いている。そしてそれは自己表現の学習ではなく、Sharingを目的としたデザインとしての学習であると言える。

(4) 考察

以上の参観及び学校長へのインタビューからは、ブータン王国の教育が、インドの影響を受けてきたこれまでの教育からGNHの理念に基づく方向性へとシフトしつつあることを予感させる。特に“Sharing Time”で行われている教育実践は、学習者中心型の学習であり、教育省から提唱された理念を基に、各学校教育現場で特色ある教育活動を展開しようとしている様子は、まさに我国の「総合的な学習の時間」における教育実践と重なる。そしてこうした教育実践には、そのプロセスに造形表現が位置付いている。それは“Sharing”という人と人、人とモノ、さらには人と自然などといった「関係性」を構築するための一手段とし

て位置付いており、デザイン学習としての様相を呈している。

表2 “Sharing Time” の課題一覧

Sl.No.	Activity
1	Purpose of School Education- Why come to school
2	WASH-Water Sanitation & Hygiene (Hand washing, proper use of toilet, keeping clean)
3	Meditation- Why? How?
4	Safety Measures
5	Who Am I? (Understanding ourselves)
6	Making Home a Healthy Environment-Social Responsibility
7	Citizenship
8	Personal Hygiene Promotes Health
9	Leaning to Manage Time
10	TV Viewing & Our Health
11	I Talk to My Parents Everyday
12	Media Literacy
13	Let Alcohol not become a problem
14	How Can I be Assertive?

3. 非営利芸術組織“バスト・ブータン” (VAST Bhutan)

(1) “バスト・ブータン” の概要

“バスト・ブータン”は、ブータン王国における Contemporary Art を中心とした芸術の振興を進めようとしている NGO 組織である。1998 年に有志のアーティストたちによって結成されたこの組織の活動拠点（ギャラリー兼アトリエ）は、ティンプーの中心街にある。（図6）この組織は、伝統美術が政府によって保護されているのに対して、現代美術がブータン国内に根付いていないことを鑑み、その紹介と振興を図るために結成された。現在取り組んでいる活動は、「若手アーティストへの支援」、「青少年の創造性育成」、「芸術への参画を通じた潜在的な職能開発の機会提供」、「芸術を通じた豊かな文化と伝統の重要性の主張」、「芸術を通じた国際的な交流の促進」などである¹⁸⁾。



図6 バスト・ブータンのアトリエ（2階）

(2) Kama Wangdi 氏へのインタビューから

本組織の主宰者である Kama Wangdi 氏に、学校教育との連携の状況についてを中心にインタビューを行った。

・造形教室の運営 休日を中心に、子どもから大人までを

対象にした造形教室を開催しており、参加希望者は多く、リピーターも多い。今後の課題は、活動に関わる予算をどのように捻出するかである。現在は運営メンバーの作品を販売した収益などから活動資金を得ている状態であるが、今後は政府（教育省）からの支援を要請していく必要がある。

・小・中学校のクラブ活動について ブータン国内の小・中学校の教育課程にはクラブ活動が位置付いている。その中には『Art & Craft CLUB』があり、本組織もそれに参画することがある。例えば、土曜日の14時から16時までは6年生以下、日曜日の同時時間帯においては7年生以上が造形作品を制作し、年間の活動の終末には展覧会を開催している。さらにその展覧会に国内外の若手アーティストを招待し、展示された子どもの作品の審査を行ったこともある。

(3) 考察

本組織では、Contemporary Art を中心的に扱いつつも、仏画などの伝統美術に対しても高い評価を与えており、ブータン王国の伝統的な芸術様式を批判する立場を取ってはいない。むしろブータン固有の伝統美術の伝承のために、子どもたちの創造性の育成に取り組んでいるのだとも言えよう。

4. GNH と造形教育の関係

(1) 王立ブータン大学研究員 Changa Dorji 氏へのインタビューから（2011年3月8日）

王立ブータン大学で教育経営を研究している Changa Dorji 氏にインタビューを行った。（図7）氏の立場からみた、ブータンにおける造形教育の全体像を語ってもらった。

・造形教育の俯瞰 ブータンの造形教育は、次の3つの要素からなると考えている。すなわち、「仏教」、「技術」、「Art & Science」の3つである。これらはすべてGNHの考え方に基づいている。伝統技芸院は、特定の職業能力開発のための学校である。ゆえに位置付けが“Institute”となっているのである。もちろん、そこでは「技術」が重要な教育目標となるが、その技術は「仏の教え」という信仰あつてのものである。一方で、地方の僧院では、早朝から仏画



図7 Changa Dorji 氏と王立ブータン大学オフィス前にて

や仏像を制作するといった授業も行われている。このような「仏の教え」と一体化している造形教育は、ブータンにおいては古くから自然に存在している。また一般的に「芸術・Art」と呼ばれるものは、「Art & Science」と表現したように、教育においては「科学・Science」と一体化したものであると考えられる。

・伝統 (Tradition) と革新 (Innovation) について 文化は伝統と革新の両面を含んでおり、いずれも欠かせないものである。特に強調したいのは、革新・発展は伝統という基盤の上でしか起こり得ないということである。特にブータンのような小国にとって、このことは重要である。基盤となる伝統が消滅してしまえば、ブータンという国家が新たな意味や価値をつくりだす発展はあり得ない。ブータンでしか形成し得ない文化を大切にしていける必要がある。

(2) 考察

氏がとらえている造形教育のあり様は、これまでに見てきた教育現場の様相と多くが一致している。特に明快に提示された3つの分類が興味深い。ブータン王国における造形教育は、当然ながらGNHの理念に基づいて実践されている。そしてその理念の背後にあるのは、他でもない仏教に対する信仰である。その信仰こそが、芸術文化を語る際には相対する概念として扱われがちな「伝統」と「革新」という立場を統合・融合しているのである。

V 結論

1. ブータン王国における造形教育の意義

これまでの調査および考察から、ブータン王国における造形教育の意義は、次のように整理することができる。

- ① 伝統美術の保護と継承のための教育
- ② 仏の教え (信仰) を通した教育
- ③ 主体的な問題解決を促す教育
- ④ 関係性を構築するための教育
- ⑤ 新しい意味や価値を生成するための教育

「①」は伝統技芸院で見たような職能開発と関連付けられた実践としての意義である。それに対して「②」はかねてから存在している仏教に対する信仰と造形とが融合している理念的実践としての意義である。「③」と「④」は主に学校教育における意義であり、必ずしも造形表現として独立したのではなく、子どもが主体となった学習プロセスにおいて「関係性」を構築するためのデザイン学習としての意義である。そこでは、「伝統」(ブータン王国に固有な価値・規範)と「革新」(現代化における新しい意味・価値)の狭間にあるブータンの未来を創造していく子どもたちが、

複雑な関係性の中で問題解決を図っていくために必要な能力の育成が目指されている。「⑤」は、「③」と「④」における能力発揮の結果もたらされるものであり、学校教育外における教育実践にも見られる可能性としての意義である。

2. 示唆

では、これまで明らかにしてきたブータン王国における造形教育のあり様は、我国の造形教育に対して、どのような示唆を与えてくれるのであろうか。

第一に考えられることは、造形表現に対する「精神性・mentality」の所在である。第二には、「伝統と革新のバランス」が挙げられよう。そして第三には、「関係性・relationship」を重視したデザイン教育としての意義である。

ブータン王国で保護・尊重されている伝統美術においては、伝統技芸院で確認したように、制作者が自らの技術で生活を営んでいく一方で、その技術は同時に仏教に対する信仰として献上される。ゆえにそこには絶対的な匿名性を帯びることとなる。我国においては仏像の制作者が誰であるのかがしばしば問題となるが、ブータンではそういうことはない。ブータンでは、それが僧侶によってつくられたのか、技芸院の生徒によってつくられたのかは重要ではなく、実在する仏像 (作品) そのものが重要なのである。(“バスト・ブータン”で作品にキャプションが付されているのを見て、不思議がるブータン人は未だに多いと言う。)そして、その仏像 (作品) に対する礼拝等を介して、人々の関係性が生まれ、ひいては信仰という意味や価値がつけられるのである。つまり、ブータン王国の伝統美術において「造形」とは、「仏」と「わたし」、そして「他・他者」との間に位置付くものであり、より大きな関係性の象徴として具現化されている。それはまさに「精神性」から生み出される「関係性」であると言える。さらに言えば、それは「中道思想」である¹⁹⁾。すなわち、論理であるか直観であるか、幸せか不幸せか、といった二元論を超越し、関係性の中で適切な歩みを実践していく立場がそこにはある。上田晶子はブータン人の幸福感を「周囲との関係によってのみ生まれるもの」と表現している²⁰⁾。実はこうした考え方は、ブータン人にとっては古くからの規範であった。しかしながら国家が近代化を迎える過程で、その規範を維持するためには、学校教育の中でそれを扱っていく必要があった。それは有形・無形文化財の保護においても同様である。国家のアイデンティティーには、同じように保護されている自然環境もあるが、それ以上に文化は重要である。自分たちの伝統という規範との関係において未来を見据えていこうとするブータン人の姿勢は、そうした姿勢を時代の節々で捨ててきてしまったわたしたち日本人にとっては、もはや取

り戻しようのない寂寥感を抱かせるものである。

以上のように、ブータン王国における造形教育のあり様からは、我国における図画工作・美術科教育の視点が、いかに「個」に重点を置いたものであるかを浮き彫りにさせる。そしてそのことに対して、個人主義的目標論からの脱却の必要性を示唆しているのではなかろうか。さらに内容論においては、「美術」という概念を次のように拡大する。すなわち「美」や「造形」そして「表現」とは、形而上学的な存在であると同時に、わたしたちが生活している〈いまここ〉に存在しているものでもあるのだ。それはデザイン的な造形観であり、そこには常に“他・他者”が存在している。さらにそこにある関係性とは、“デザイナーとユーザー”という主従的な関係ではなく、自然や文化をも包摂したホリスティックな関係性である。ここにおいて、関係性そのものをつくりだしていこうとする新たなデザイン教育の意義と可能性を見出すことができるのではなかろうか。

末尾になりましたが、本研究に際して誠実にご対応いただいたブータンで出会ったすべての方々には深く御礼申し上げます。

註

- 1)『地球の歩き方』編集部『地球の歩き方・D31・ブータン』ダイヤモンド社、2009年、p.5
- 2)山本けいこ『ブータン ー雷龍王国への扉』明石書店、2001年、p.29
- 3)宮下史明「GNH（国民総幸福量）の概念とブータン王国の将来 ーGNPからGNHへー」早稲田商學、2009年、pp.39～40
- 4)鈴木法之「GNH（国民総幸福量）の国ブータン ー人々は本当に幸

- せか？」財団法人静岡総合研究機構『SRI』No.99、2010年、p.28
- 5)『日本経済新聞』2010年10月18日付朝刊より
- 6)宮下史明、同掲、p.51
- 7)津川智明「貧しさは不幸なことか：ブータンの開発から考える」龍谷大学経済学論集・46（5）、2007年、pp.144～145
- 8)本研究の現地視察調査においても、上記の規定に従った視察日程を事前に計画し、先方に申請した上で、1泊200ドルの公定料金の設定の基に調査研究を展開した。全日程を通して、ガイドのPhurba Tshering氏とドライバーが同行した。（図8）
- 9)北海道大学観光学高等研究センター編『コミュニティ・ベースド・ツーリズム事例研究 ー観光とコミュニティの幸せな関係性の構築に向けてー』日本交通公社、2010年、pp.59～61
- 10)平山修一『現代ブータンを知るための60章』明石書店、2010年、p.68
- 11)永田智章「ブータン王国における経済開発と国民総幸福量 ーGNH追求政策をめぐる経済学的考察ー」p.201
- 12)山本けいこ『はじめて知るブータン』明石書店、1991年、p.34
- 13)『地球の歩き方』編集部、同掲、p.294
- 14)平山修一、同掲、p.68
- 15)平山修一、同掲、p.60
- 16)この内容は、ジグメ・ロセル小学校のChoki Dukpadearu 学校長から提供された資料。“Jigme Losel Primary School Improvement Plan 2006 - 2011”からの抜粋である。
- 17)同掲資料より抜粋
- 18)“バスト・ブータン”（VAST Bhutan）のホームページより抜粋 <http://www.vast-bhutan.org/>
- 19)宮下史明、同掲書、pp.52～53



図8 ガイドのPhurba Tshering氏らと（Paro Airportにて）

Art education in the Kingdom of Bhutan: Possibility as design education found by GNH

Yoshiichi OIZUMI

Yokohama National University

Abstract: In this study, I clarify a summary of art education in the Kingdom of Bhutan and get a suggestion from there. Therefore I push forward a study in the following procedures. ① I discuss a summary of the Kingdom of Bhutan. ② I discuss a summary of the education in the Kingdom of Bhutan. ③ I inspect art education in the Kingdom of Bhutan and investigate it and examine positioning of art education from GNH and relations of the education. ④ I get a suggestion for art education in our country. I inspected “National Institute for “Zorig Chusum” and “Jigme Losel Primary School” and “VAST Bhutan (NGO)” and performed an interview to Mr. Changa Dorji which is the researcher of the Royal Bhutan University. And I clarified positioning of the molding education in Bhutan from there. From the above-mentioned consideration, the following matters were important for molding education in the Kingdom of Bhutan. Education for succession of the traditional art. Education through the faith. Education to promote a solution of the problem. Education to build a relationship. Education to generate new meaning and value. The state of art education in Kingdom of Bhutan gives a suggestion about mentality in the molding, tradition and balance of the innovation, the serious consideration of relationship to art education of our country. And we can find new possibilities of design education.